第 16 冊

『今こそ知っておきたい災害の日本史』

岳真也、PHP文庫、2013年

＜中＞

天正地震

前回は、平安時代の「貞観地震」と鎌倉時代の「永仁鎌倉地震」の２つの大地震について見てきました。時代区分で言えば、古代と中世ですね。

今回は近世の地震について見ていきます。「天正地震」と「慶長伏見地震」の２つを取り上げます。そして、まずは「天正地震」から、はじめましょう。

戦国武将の運命がからむ

まずは、**岳真也氏の『今こそ知っておきたい災害の日本史』**から災害の状況を確認しましょう。天正地震が起きたのは、**天正13（1585）年11月29日**のことです。

戦国における3人の天下人と地震の関係は、それぞれ異なっていて、なかなかに興味深いものがある。
織田信長は、大きな地震にあっていない。
徳川家康は慶長伏見地震にはあっているが、その時はまだ天下人ではなかった。また、天下を取った後も、「慶長東南海地震」「会津地震」「慶長三陸地震」と各地で大地震が起こってはいるが、直接の被害は受けていない。
豊臣秀吉は、天下人になった後に、二つの巨大地震にあっている。「天正地震」と「慶長伏見地震」

だ。

*前者の天正地震は、天正13（1585）年11月29日の夜に起きる。美濃と伊勢、現在の岐阜県から三重県にかけての三つの断層が動いた、**マグニチュード8くらいの直下型地震**と推定される。*

ただ若狭湾や伊勢湾に津波の記録があり、震源は一か所だけではなかったとも考えられる。

えっー、マグニチュード８ですって？！「どんだけー」と思います。しかも都市「直下型」だそうです。都市ということは家屋が密集し、人口も多いですから、被害が大きくなりますね。続きはこうです。

この地震の様子をイエズス会の宣教師ルイス・フロイスが著した『日本史』から見てみよう。

「それはかつて人々が見聞きしたことがなく、往時の史書にも読まれたことのないほど凄まじいものであった。というのは、日本の諸国でしばしばで大地震が生じることはさして珍しいことではないが、本年の地震は桁外れで大きく、人々に異常な恐怖と驚愕を与えた」

秀吉はこの地震を、琵琶湖の西岸、比叡山の麓の坂本の地で体験している。山崎の戦いで勝利し、敵の明智光秀を死地に追い込んだ明智勢の居城だ。

『日本史』によると、

「手がけていた一切のことを放棄し、馬を乗り継ぎ、飛ぶように大坂に避難した。そこは彼には最も安全な場所と思えたからである」

と、見方によっては滑稽で、微笑ましくさえもある。天下人ならざる態度に、当時の人々は失笑すらしただろう。

なんと、秀吉は大坂城ではなく、明智光秀の居城である坂本城にいたのですね。しかも、そこから安全と思われる大坂城めざして一目散に逃げたのです。でも、彼は無事でした。恐怖を覚えたことでしょうが、命に別状はありませんでした。

さらに続きを見てみましょう。

しかし、もっと深刻な被害を受けた大名もいる。

当時、秀吉の元の居城たる北近江長浜城の主だった山内一豊（かずとよ）は、一人娘の与禰（よね）を失っている。

長浜は地震による地割れで家屋が飲み込まれ、その後に火災に襲われて、町の大半が灰燼に帰した。長浜城もほぼ全壊したという。

一豊は京都に出かけていて留守だったが、御殿にいた正室の千代は何とか難を逃れた。揺れがおさまってから、「与禰はどこだ」と、千代は家臣に尋ねたが、与禰はすでに乳母に抱かれたまま棟木に押しつぶされ、息を引き取っていた。齢（よわい）わずか六つであった。

一豊夫婦の悲しみは、いかほどであったろう。

他にも家老で親戚筋の乾彦作など、十数人の重役が亡くなるという悲惨な目にあった。前田家でも、越中の木舟（現・富山県高岡市）城主だった利家の弟の秀継夫妻など、多数が圧死した。木舟城は、秀吉の越中征伐により領土争いが決着し、佐々成政（なりまさ）から奪ったばかりの城だった。

山内一豊はのちに土佐（現在の高知県）一国の城主となります。信長、秀吉に仕え、最後は関ヶ原の合戦で功績を挙げ、徳川家康から土佐を与えられたのでした。妻の千代は「内助の功」の見本とされる女性ですよ。

その山内家の娘が地震の犠牲者になってしまうのですね。親としては耐えられないですね。しかも、大切な家臣も亡くなってしまいます。

現在の長浜城

さらに、続きを見てみましょう。

美濃では大垣城が倒壊、焼失。奥美濃の郡上八幡（現・岐阜県郡上八幡市）では、一瞬にして集落が消えた。伊勢の長島では、織田信長の次男信雄が、占拠していた長島城内で倒壊と液状化現象を経験している。

京の都でも、寺社の伽藍が破損するなどの被害にあった。

しかし、この地震で最も大きな被害を受けたのは、飛騨白川郷（現・岐阜県大野郡白川村）の帰雲（かえりくも）城の城主・内ヶ島氏理（うちがしまうじまさ）だろう。

帰雲城下は鉱山資源の宝庫で、小さいながら活気があった。

氏理は成政に味方し、秀吉方の金森長近（ながちか）に責められて降伏した。

「わが領地は没収されるやもしれぬ」と覚悟したが、幸運なことに和睦が成立し、自領は安堵されることとなった。

地震が起こったのは猿楽師なども呼び、領民も参加しての祝賀の宴の前日だった。・・・当日亥の刻（午後10時頃）背後にそびえたつ帰雲山の山腹が両断され、城と共に城下の300余軒が、あっという間に土砂に埋もれてしまったのだ。城は活断層のごく近くに建てられていた。

うーん、凄まじいですね。とくに飛騨の帰雲城や城下町が地震で崩れた土砂の下敷きになってしまった。ということは、たくさんの人が生き埋めになってしまったということなんです。阿鼻叫喚の地獄絵図とはこのことを言うのでしょう。

さて、この天正地震が起きた前後の時代背景を見ていきましょうか。

この頃、羽柴秀吉は、強力なライバル徳川家康が目の上のたんこぶのような大きな存在となっていました。なんと、信長の次男信雄が家康と手を組み、**小牧長久手の戦い**が始まったのです。時は天正12（1584）年3月13日のことでした。

愛知県公式ガイドのホームページ
「Aichi　Now」より
長久手古戦場公園

秀吉は大軍10万人を投入しますが、4万人の家康・信雄連合軍に敗れます。数だけ見れば、秀吉の方が有利でしたが、なぜ負けたのでしょう？

私は、「負けて当然」だと思います。なぜなら、秀吉が動かしている大軍というのは、もとはと言えば信長の軍団です。信長の軍団を使って、信長の次男信雄と戦おうというのですから、兵達のモチベーションは上がりませんよね。

そこで、秀吉は作戦を変更しました。老獪な家康を相手にせず、処しやすい信雄一人を徹底的に「攻め」て追い詰め、和睦に持っていく、という策に出たのです。

1月11日、秀吉の目論見通りに、信雄は家康に相談せず、勝手に降参して和睦に応じてしまいます。分断政策が成功したのです。秀吉が用意した高い官位に目がくらんだのかもしれません。

家康としては、信雄を擁していたから戦うことができたのですが、信雄が秀吉と和睦した以上、どうしようもなく、手を引くことになりました。

こののち、秀吉は「反秀吉包囲網」ともいうべき相手を各個撃破で潰していきます。

翌年の３月、雑賀衆と根来衆を攻撃して紀伊を平定します。続いて、弟秀長を総大将とし十万を超える大軍で四国を責めさせ、その結果、長宗我部元親は降伏します。元親は、四国全域を領有していましたが、土佐一国だけ安堵されることになります。

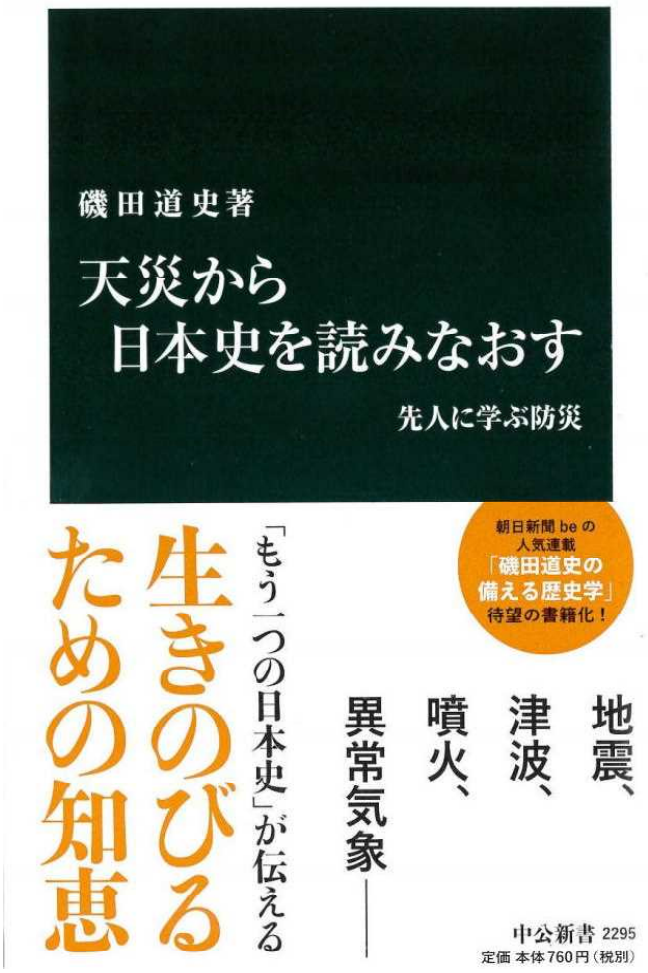
7月には「関白職をめぐる公家同士の争い」に便乗して、**近衛前久（さきひさ）**の猶子（ゆうし）となって、関白宣下を受けます。この人物は**ＮＨＫの大河ドラマ『麒麟がくる』**でちょくちょく登場していましたね。本郷奏多さんが演じていました。

さらに、8月には越中の佐々成政を討つため、「富山攻め」を開始します。成政は逃げて家康のもと

へ行き、再挙することを頼みますが、家康は動きませんでした。

その結果、成政は白旗を揚げ、領地を没収されて大坂に移住し、御伽衆として秀吉に仕えることになりました。

秀吉にとって、それら一連の戦を終えた後の「小康状態」の時期に天正地震が起こったのです。実は天正地震が起きる前、秀吉は総力を挙げて徳川家康を討つための準備をしていました。



天正地震の影響とその後の世界について、**磯田道史氏**の**『天災から日本史を読みなおす』（中公新書、2014年）**で見てみましょう。

天正地震は近世日本の政治構造を決めた潮目の大地震である。この地震が起きなければ、徳川家康は二ヶ月後に秀吉の大軍の総攻撃を受けるはずであった。兵力は秀吉の方が圧倒的に優勢。・・・・・・

家康は「滅亡」の可能性さえ視野にあった。それが証拠に「これはまずい」と感じた徳川家屈指の知恵者で片腕の石川数正が真っ先に裏切った。「一〇万石」を餌に秀吉が寝返らせたとの噂に、家臣団は動揺した。これが天正13年11月13日のこと。

18日、勢いに乗った秀吉は、徳川攻めの前線基地となる大垣城に兵糧蔵を建てさせた。「塗屋（ぬり

や、土蔵）とし、5000俵ほど入れ置け・川端の船着きに建て、まわりに堀を掘り、用心の良い場所にせよ」「古米と新米を入れ替えよ」。秀吉の指示は細かい。前線兵士に味の良い新米を食べさせる心配りまでしている。

翌19日には、<u>秀吉は家康追討を公言。</u>「人数（軍勢）を出し、家康を成敗することに決めた。出馬のことだが、年内は日がないので、正月十五日以前には（徳川攻めに）必ず出陣する」（「真田昌幸（まさゆき）宛秀吉書状」）。

戦争になると、家康は不利であった。秀吉軍の兵力は「毛利・浮田（宇喜多）・四国の人数が加わり、長久手の戦いの時の人数より多勢」になるのは確実（『御和談記』）。それで、家康は、娘の嫁ぎ先の大名・北条家から援軍の約束をとりつけていたが、他家の援軍は当てにならない。さらなる家臣の裏切りも怖かった。

このとき家康が必死で考えた・・・・。秀吉軍１０万の来襲が想定されるのに家康の兵力は４万強しかいない。家康にとって厳しい戦いが始まろうとしていた。

現在の大垣城
ホームページから

えっ、あの徳川家康が滅びたかもしれなかったんですって！！秀吉の家康討伐軍が出発する直前だったんですって？！もし家康が滅ぼされていたならば、江戸幕府は生まれなかったことになります。だとすると、日本の歴史が大きく代わった可能性があります。たいへんなことですよ、これは。

ところが、**天正地震が起きたことで、秀吉軍対家康の戦いは、回避されていきました**。家康は命拾いをしたんですね。なんと、家康はラッキーなんでしょう！！それに比べて、秀吉はなんとアンラッキーなんでしょうか！？　先に進みましょう。

天正十三年（1585年）旧暦11月28日、徳川家康は、岡崎城で、豊臣秀吉の使者と激しくやり合っていた。家康が「わしがなぜ秀吉に従い、京都に上る必要があるのか」といえば、使者は「ならば、秀吉は大軍をもって攻めてきますぞ」と脅した。秀吉は徳川討伐の進発期日を「正月十五日」と決めていた。

家康は強気を装った。「秀吉が大軍でも十万を超えることはあるまい。わしが三河（愛知県東部）、遠江・駿河（静岡県）、甲斐（山梨県）、信濃（長野県）五カ国の人数を集めれば、三、四万は来るだろう。潔く一戦するのは望むところ」と捨てゼリフを吐いた。しかし同時に、家康は秀吉に重要なサインを送った。「去年、長久手の戦いで、わしは秀吉麾下の有名武将たちを討ち取った。秀吉は怒っているだろう。（殺されるかもしれず）徒（いたずらに）に京都に上れない」（「武徳大成記」）と本音を語ったのだ。

こんな緊張するやりとりをした翌日の深夜に、天正地震が起きます。その時、家康は前日から援軍の礼状を伊豆韮山城（静岡県）の北条氏規（うじのり）に送るなどして、一日中、戦争準備に明け暮れ、

眠りについたところで揺れを感じたといいます。

一方、秀吉の方は、先に宣教師フロイスの記事を紹介したとおり、一切を放棄し、馬を乗り継ぎ、飛ぶようにして大阪へ避難したのでした。つまり、秀吉は震度５と推定される揺れに、家康討伐の準備を投げ出し、大阪に逃げ帰ったのです。さらに、続きます。

その後、秀吉のもとに信じられない報告が届いた。家康討伐の前線基地、兵糧米を入れておいた大垣城は「ことごとく覆り（震度６）、その上、出火。城中一家も残らず焼けた」（「一柳家記」）。徳川追討軍の先鋒が期待されていた山内一豊の長浜城（滋賀県）は倒壊。（このとき、一豊は京都にいて助かったが、愛娘与禰は亡くなっている、岩城注）。圧死者多数。城下は火の海で出陣どころではなくなっていた。織田信雄（のぶかつ）の伊勢長島城（三重県）も「大地震で天守以下が焼け散り」茶道具を取り出すので精一杯であった（「飯田半兵衛宛秀吉書状」。

震度５～６に達した近江（滋賀県）・伊勢（三重県）・美濃（岐阜県）・尾張（愛知県）では戦争どころではなくなりました。なぜならば、合戦は敵地に近い者が先鋒となります。そこが大地震でやられ、秀吉は一夜にして前線基地を失ったのですから。一方、家康の領地、三河以東は震度4以下でほとんど被害を受けませんでした。

徳川家康

この事態に秀吉が「妥協」することになりました。上洛命令を拒否している家康に対し、なんと人質を出すのです。え、逆じゃないですか？しかも、**差し出した人質は誰でしょう？**

なんと、**自分の妹・朝日姫を家康の正室として嫁がせた**のです。家康をなんとしても上洛させたいので、秀吉も必死なんです。

ところが、それでも「狸親父」家康は岡崎から動こうとしません。

これに対して、秀吉はどうしたか？

あきれますが、4ヶ月後に**秀吉の生母・大政所を人質として家康のもとに送った**のです。そして、「私に臣従の姿勢を見せなさい」と、さらに上洛を家康に促します。

さすがの狸親父家康も、これには折れてしまいます。実の妹だけでなく、母までもを人質に差し出す

秀吉のやり方に「感服」したか「唖然」としたのでしょうか。家康は「俺とは違う」「天下泰平のためにはここで妥協した方が良いか」と思ったのでしょうか。

こうして、徳川家康は上洛して、秀吉に臣従を誓うことになります。実は、この前後に秀吉は**羽柴秀吉から豊臣秀吉に**変わります。天正14年（1586年）9月9日、秀吉は**正親町（おおぎまち）天皇**から豊臣の姓を賜り、12月25日には**太政大臣**に就任し、ここに豊臣政権を確立させていきました。

このような秀吉の動きに対して、**磯田道史氏**は**『天災から日本史を読みなおす』**で、鋭い言葉を使って表現しています。引用してみましょう。

秀吉は地震の復興を待って、ゆっくりと家康を攻め、徳川家の息の根を止めておくべきであった。そうすれば、徳川政権は成立せず、秀吉の愛児・秀頼の運命も変わった。秀吉が家康などの有力大名を武力で制圧していれば、近世日本はより中央集権的な国家になっていただろう。せっかちな秀吉はせっかちで成功し、せっかちで失敗した。家康は天正地震に助けられ豊臣政権下でナンバー2の座を確保。次につなげた。大規模な地震災害は、誰がどんな国家を作るか、大きな歴史の流れにまで影響することがある。

うーん、そうですよね。人質など出さなかったら家康は上洛もしなかっただろうし、そうすれば10万以上の大軍を岡崎に送って家康を殲滅できたかもしれません。どう考えても、その可能性が高かったのです。

しかし、事実はそうなりませんでした。秀吉も家康を怖がっていたのでしょうか。家康と雌雄を決着させるということにためらいがあったのでしょうか。それとも、優しすぎたのでしょうか？

このためらい、躊躇（ちゅうちょ）が、愛する秀頼の命を縮めることになってしまうんですね。

ですから、権力者のちょっとした考えや感情によって、その後の歴史が変わってしまうのですね。その典型例が天正地震に遭遇した秀吉なんです。

こののち、家康は上洛して臣従を誓った後、秀吉は「関白」という立場を利用して、島津を倒し九州の平定を実現します。さらに、関東の北条氏も攻めて打ち破り、全国統一に成功することになります。

ところで、天正地震後の影響やその後の歴史を**『天災から日本史を読みなおす』**でみてきました。次に、**『今こそ知っておきたい災害の日本史』**では、どのように記述されているのでしょうか？

実は、岳氏と磯田氏とで、その表現が微妙に違っています。**『今こそ知っておきたい災害の日本史』**では、こうあります。

「天正地震」に関しては、無様なほどに怯えはしたが、秀吉は運が良かった。もし、もう少し早く地震が起きたならば、「小牧・長久手の戦い」に、どう影響したか分からないし、もう少し遅ければ、「九

州平定」などが難しくなっただろう。

さらに、長浜城主だった頃や、「富山攻め」の頃であったなら、山内一豊や前田利家の悲劇は、秀吉のものだったかもしれない。

また、内ヶ島氏にしても、小さな、取るに足らないような勢力だったとはいえ、多くの鉱山資源を有していたということは、相当に豊かではあったのである。加えて、一向宗とも連携していたというのだから、侮れない。

金森勢に攻撃させて、降伏させはしたが、和睦の形にし、所領を秀吉が安堵したというのも、またぞろ叛旗を翻されるのを危惧したためではなかったか。

その内ヶ島氏が一瞬にして全滅し、「豊富な鉱物資源が舞い込んできた」というのだから、ラッキーそのものである。

上り調子の天下人だった秀吉には、地震すらも味方したといえようか。有頂天の「猿面」が見えるようだ。

「秀吉は運が良かった」「秀吉には、地震すらも味方した」と**『今こそ知っておきたい災害の日本史』**の作者**岳真也氏**は考えているのですね。天正地震の起きた時期が良かったから、小牧・長久手の戦いでなんとか大敗しないですんだし、九州平定もできたし・・・と考えているのです。

それに対して、**『天災から日本史を読みなおす』**の作者**磯田道史氏**は「せっかちな秀吉はせっかちで成功し、せっかちで失敗した」と考えています。前線にたつはずの部隊が大きな被害を受け、弾薬などを保管していた大垣城などが倒壊して、家康討伐は無理だと早合点したから、家康をやっつけることができなかった、失敗だ、と考えているのです。

秀吉にとって天正地震は「良かった」のか「悪かった」のか、どちらなのでしょう？

これは、流れている時間のどこを切り取るかで、見方が変わってくるのですね。筆者は家康と秀吉で言えば、家康の方が好きなので、「失敗」してくれて良かった、と思っていますが、あなたはどうですか？

ただ、**『今こそ知っておきたい災害の日本史』**の作者**岳真也氏**は、先ほどの引用箇所のすぐあとに、次のようにも書いています。

*「しかし、後に述べるように、その「運」も実は、そこまでだったのである」*と。

慶長伏見地震

秀吉が経験した大地震の２つめが「慶長伏見地震」です。**文禄5年・慶長元年（1596）閏７月13日**に起きました。しかし、慶長の年号は10月に改元されてからのものです。ですから地震は、文禄5（1

596）年の閏7月13日子の刻（午前0時頃）、皆が寝静まった時分に発生しました。

豊臣政権にとどめを刺した直下型

まずは、災害の状況を見てみましょう。

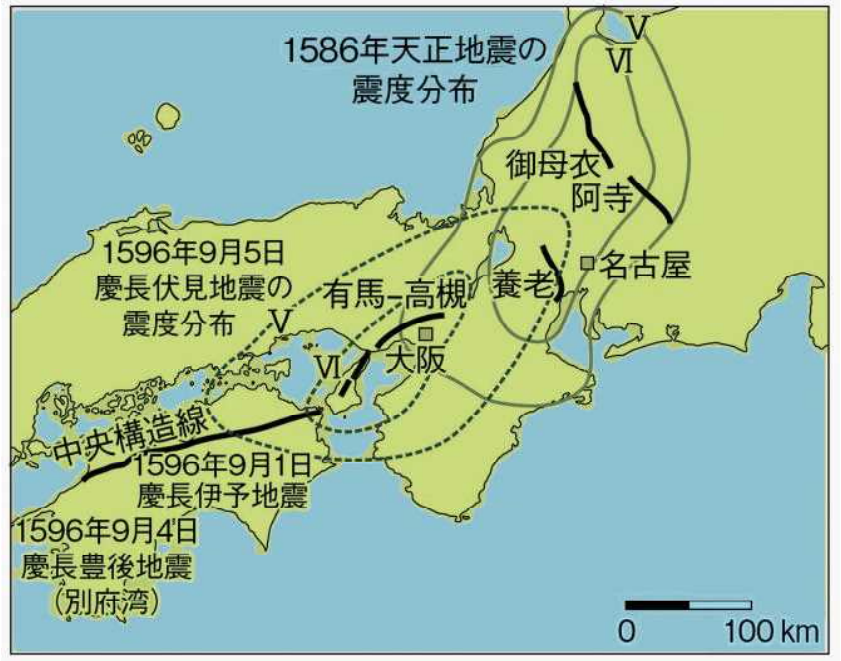
規模はマグニチュード7くらいと推定され、さきの天正地震と比べるとやや小さい。
ただ、京に近い有馬高槻断層帯を震源とし、六甲淡路島断層帯も連動したと推測される直下型地震で、この頃の政治の中心であった京都から播磨にかけて、大きな被害があった。
京では地盤の安定した上京や東山地区の被害は少なく、下京や西山の被害が大きかった。
東寺は五重塔や大師堂など7つの堂宇が破損もしくは倒壊した。嵯峨野では天龍寺・二尊院・大覚寺などが倒壊した。さらに京都盆地の西側の山崎や八幡での被害は大きく・・・・・公卿の山科言継（やましなときつぐ）の日記である『言継卿記』に・・・ことごとく家屋が倒壊し、死者も数知れないというのだ。京都だけでも数千の死者が出たようである。

最初に見た天正地震よりも、規模は小さかったようですね。でも、この地震の影響は凄いものがあります。続けていきましょう。

この地震は西日本に限られた地震だった。
一方これより西では直前に二つの大地震が起こっている。4日前には現在の愛媛あたりの中央構造線を震源とする「慶長伊予地震」が、前日には別府湾付近で別府湾日出生断層帯の東部を震源とする「慶長豊後地震」が発生。後者は津波をもたらし、千人近くの死者もでた。

慶長伏見地震はそれら一連の地震とともに、「西日本全体の活断層が、連動して起こった巨大な地震だった」という説が、現在では有力になっている

西日本に限られた地震なんだけれども、慶長伏見地震の４日前には**「慶長伊予地震」**が起きていたし、前日には**「慶長豊後地震」**が起きていたと言うことなんですね。「直下型」で「西日本全体の活断層」が連動して起きた地震のようです。



「大阪北部地震を地震学者はどう見たのか
注目される慶長伏見地震との関係」の記事より
転載させてもらいました
https://gendai.ismedia.jp/articles/-/56170?page=3

でも、ちょっと待ってください。なんで**「慶長伏見地震」**って言うのでしょうか？「慶長」は時期のことだからわかりますよ。「伏見」って何ですか？京都の間違いではないんですか？

いやいや、「伏見地震」で正しいのです。**では、なぜ「京都」ではなく「伏見」と言うのでしょうか？**

「伏見地震」と呼ばれるのは、**完成したばかりの「伏見城の天守閣」が、この地震によりあっけなく壊されてしまったから**なのです。

では、伏見城とは、どういう城だったのでしょうか。

はじめは、秀吉の隠居屋敷として計画されたようです。

天正20（1592）年9月3日に建設が始められましたが、「場所を決定してから20日間もなかった」というくらいの急ピッチの工事だったようです。

ところが翌2年、その城が明国の使節との和平交渉の場に選ばれたんです。さらに同年8月、秀吉と淀殿との間に**拾丸（ひろいまる、豊臣秀頼）**が生まれます。びっくりですね。

その拾丸に大坂城を与えて、「伏見城を秀吉の本城とする」ということになります。**「豪華絢爛な城」**への大規模な改修が決められたのです。

ところが、慶長伏見地震で、急ピッチの工事で出来上がった**伏見城の天守が崩れ落ちてしまいました**。天守閣など主要な建築物が壊れ、各大名家も大きな被害を受け、合わせて600から1000人余りが犠牲になったといいます。

これに追い討ちをかけるように、秀吉には「ダメ押し」の衝撃ニュースが届きます。**ほぼ完成していた方広寺の大仏が、やはりひどい被害を受けた**のです。

当時、奈良の大仏は焼失していました。それよりも大きな大仏を造ろうとしていた秀吉は、予算と時間の節約のために、木の枠に漆を塗り、金箔を施す方法で大仏を造りました。奈良の大仏のように鋳造ではなかったのです。それが災いします。

醍醐寺の座主・義演の日記である『義演准后（じゅんごう）日記』には、
「大仏殿は無事に残ったが、大仏は大破して、その左手は崩れ落ち、胸部も崩れた。所々にひびができ、光背は無事だが、四方の隅柱が少し崩れた」

といったことが書かれていました。伏見城とともに方広寺の大仏も、倒壊してしまったのです！！なんたる不運でしょう。

それでは、**岳真也氏**の『**今こそ知っておきたい災害の日本史**』から、この時代の概況を見てみましょう。

天正十八年、全国統一がなると、秀吉は計画を実行に移そうとする。しかし翌19年にはその秀吉に不幸が続く。
まずは後継者に指名していた鶴丸が病死した。「もう子供も生まれまい」と覚悟した秀吉は甥の秀次を養子として関白職を譲った。
それから間もなく鶴松に続き、弟で参謀の豊臣秀長が病死する。さらに、信長時代から共に歩んできた千利休との仲は急速に悪化して、利休を自刃させる。
それでも、9月には唐入りの前線基地である名護屋城の築城が開始される。そして1592年3月に完成。その名護屋城から8月12日ついに大軍を朝鮮に向け出発させた。兵の数は総勢15万8000人で、９つの軍団に分かれていた。・・・7月には、明軍が参戦し日本軍にとって戦況はより悪化した。
同じ頃、大坂城では秀吉の生母である大政所が危篤になり、名護屋城に出陣していた秀吉は、至急大坂に戻る。しかし死に目には会えなかった。・・・

秀吉にとっては、たまらない状況ですよね。愛する息子は死ぬわ、頼りになる弟は死ぬわ、そして長年右腕のようにしてきた千利休を自害させるわ、ついには母上が亡くなるんですね。これだけ、不幸が続けば、神様も仏様も信用できなくなるでしょうね。

豊臣秀吉

千利休→

『今こそ知っておきたい災害の日本史』を続けましょう。

3月、講和交渉を開始する。・・・・
8月側室の淀殿が拾丸こと秀頼を出産し、朝鮮在陣の兵に帰国のゆるしが出る。11万の兵のうち5万は守備軍として残り、6万は帰国。休戦状態となり和平交渉が続けられることになる。
かくして文禄3年は比較的穏やかに過ぎるが、悲劇は進行していた。秀吉は拾丸をしてことの外可愛がり、是が非でも拾丸に自分の後を継がせたくなる。
「秀次はじゃまだ」そう秀吉は思い始め、秀次の方には「用がなくなれば切り捨てるのか」との不満が募る。二人は当然、対立した。
翌4年7月3日、聚楽第の秀次のもとに、石田三成らが訪れ、
「謀反の疑いあり」と秀吉の命をつたえる。そして高野山に幽閉され15日には切腹を科せられた。
さらに8月2日には秀次の正室や側室から子供らまで残さず一族39名の処刑が実行された。その残忍なやり方には、多くのものが眉をひそめ、「これで太閤さんも終わりやな」と噂していたという。

不幸な出来事が続いた後、拾丸が誕生するという慶事が起きます。ところが、鶴丸が亡くなった後に後継者と決めた豊臣秀次と秀吉との仲が決裂していきます。そしてついには、秀次を処刑します。それだけではありません。秀吉の側室やその子供なども処刑したのです。

思わず「なんで？」と叫んでしまいそうです。あまりに卑劣な所業で、秀吉に対する信頼は地に落ちてしまいます。

このあたりのことに関して、**磯田道史氏**は**『天災から日本史を読みなおす』**のなかで、次のように述べています。地震が起こった直後、大名達の本心が露呈された様子を示す興味ある話です。

一番に駆けつけたのは細川忠興（ただおき）という大名。これは多分にゴマすりで、救助隊は連れず、一人で疾走してきた。案の定、細川は秀吉が死ぬと、手のひらを返して徳川家康にすりより、秀吉の子・秀頼を殺す大阪夏の陣では先鋒を希望し、豊臣を猛烈に攻めた。

対照的なのが加藤清正。秀吉の怒りを買い謹慎中であったが、秀吉の身を真心から案じていた。加藤は秀吉と同じ村の出身で親戚である。加藤は足軽200人に梃子（てこ）を持たせ、秀吉救出の準備をした上で倒壊した秀吉の御殿に駆けつけてきた。だから細川に遅れ、2番目に到着。のち加藤の家は取り潰され、徳川幕府はその領地、肥後熊本54万石を細川の家に与えている。

他の大名はどうであったか。地震の夜の徳川家康と最上義光（よしあき、出羽山形城主、伊達正宗の伯父）の動きは興味深い。当時、秀吉を最も憎んでいた大名が、最上である。理由があった。最上の娘は東北一の美女であった。噂が聞こえ、秀吉の甥・関白秀次の側室に渋々差し出したら、直後に秀次が失脚。あろうことか秀吉は、まだ15才のこの娘を、牛車で市中を引き回しにしたうえ三条河原で他の側室ら30余人とともに処刑。しかも遺体を引き渡さず、大穴に遺棄し、「畜生塚」と名付けた。最上の妻は娘を殺されたショックで14日後に死去。最上は最愛の妻子をほぼ同時に失った。

それが一年前。だから最上は地震が起きても、秀吉のもとに駆けつけなかった。「諸将は秀吉に馳せまいるうち、義光は騾馬に乗って家康公の御館へ馳せ行き『今は物騒だ。（秀吉見舞いの）登城は必ずご無用。万が一のことがあってもこの出羽守（最上）がお側にいる。ご安心を』といった」。幕府が作った家康史料集「朝野旧聞ほう藁（こう）」（※「ほう」の漢字が出てこない、岩城）にある「時代記」の記述だ。

秀吉の元に一番にやってきたのは、**細川忠興**。この人物の妻が通称**細川ガラシャ（玉子）**と呼ばれる女性です。ガラシャは名前の通り、キリシタンです。そして、彼女の父は、織田信長を殺した**明智光秀**ですね。そして、細川と言えば、**元総理大臣細川護熙（もりひろ）氏**がその子孫ですよ。

加藤清正は、肥後熊本藩初代藩主になります。熊本では今でも清正公（せいしょうこう）さんと呼ばれて親しまれています。藤堂高虎や黒田孝高と並ぶ築城の名手として知られ、熊本城や名護屋城、江戸城、名古屋城など数々の城の築城に携わりました。熊本城は先の熊本地震で大きな被害に遭いましたよね。**名古屋城**を訪れた時に、加藤清正が築城に関わったということを知り、ビックリしたことを覚えています。だって、名古屋城（江戸城もそうですが）といえば、徳川御三家のお城で、城を造ると言うことは、城の弱点も知り得たわけですから、そんなことをよく徳川が許したものだと感じたのです。

さて、**最上義光（よしあき、**出羽山形藩の初代藩主）の娘さんの話は気の毒ですね。まだ、15歳なのに、しかも彼女になんらの非があるわけでもないのに、関白豊臣秀次の妻だったというだけで、殺されてしまったわけですから。母親は憔悴して亡くなってしまったのでしょうか、ほんとに可哀相です。そして、最上義光の気持ちも痛いほどわかります。

『**天災から日本史を読みなおす**』の続きを見ていきましょう。

地震は大地だけでなく政治も動かす。教科書にはない真実を書いておく。豊臣政権の崩壊は、実は伏見地震が引き金になっている。地震のせいだけではないが、地震後の舵取りのまずさで豊臣家は滅亡した。

地震時、豊臣政権の大名たちは朝鮮出兵で疲れ、困窮して、不満をつのらせていた。このままでは甥の関白秀次に政治の求心力が移る。秀吉と石田三成はそれを警戒した。先手を打って、秀次とその妻子側近を丸ごと処刑。それで家族を殺された大名が続出。多くの大名たちが朝鮮出兵の不満と相まって、秀吉・三成に恨みの目を向けた。

そこへ伏見地震がきた。ところが、秀吉は地震で崩れた自分の居城＝伏見城をもっと豪華に再建せよ、同時に、朝鮮に再度攻め込めと命じた。・・・
豊臣から徳川へ人心が移りはじめたきっかけは地震であった。地震後、せっかく明との講和がまとまりかけたのに朝鮮に再出兵すると言い出した秀吉に人々はあきれた。・・・・・
地震で完全に政治の潮目が変わった。

「地震で完全に政治の潮目が変わった」と磯田氏は断言しています。同じように、岳氏も「こうして**逆風の吹き始めた秀吉と豊臣政権に慶長伏見地震が止めを刺す」**ことになる、と言い切っています。

地震の後の話を続けていきましょう。

伏見桃山城運動公園にある
伏見桃山城キャッスルランド
の「目玉」だった伏見桃山城
（キャッスルランドは閉園
しました）

地震が起こってしばらくして、明の勅使沈惟敬（しんいけい）がやってきました。この交渉は全くうまくいきませんでした。明も日本も、自分勝手な言い分を相手に押しつけただけでなく、実務型の方も秀吉の望みを明側に「飲ませる」ことに成功していなかったからです。

したがって交渉は決裂します。明国側は秀吉の要求を全面拒否したのでした。それに対し、秀吉は激怒して、再び朝鮮派兵に踏み切ってしまうのです。つまり、朝鮮出兵を続ける理由の１つは、明が秀吉の要求を拒んだからです。

でも、それだけが２度目の朝鮮出兵の理由ではないです。**『今こそ知っておきたい災害の日本史』**では、どのように考えているのでしょうか。見てみますね。

もう一つ。秀吉には朝鮮出兵を続けなければならないより大きな理由があった。端的に言えば
「豊臣政権の名誉回復、失地挽回」
である。
秀吉は派手好きで、何でも黄金で飾ったという。むろん、それは秀吉の好みであったことは確かだが、何も個人の趣味だけで、莫大な金銭を使ったわけではない。
もとが貧しい百姓の倅（せがれ）でしかない。そういう天下人は、金や金箔で着飾らざるを得なかった。秀吉が政治的にも軍事的にも、
「この時代の第一任者であったこと」

は疑いない。しかし実力だけでは、大衆の支持は得られない。
正統にして高貴な血筋であれば、それを宣伝することもできるが、秀吉にはそのような条件は全くなかった。しかも、信長の恐怖政治のすえの横死を目の当たりにしていたので、信長の如き方針を取るわけにもいかなかった。
まるで別のフィクションが必要だった。そしてその代表ともいえるのが「伏見城」と「方広寺の大仏」だったのだ。
伏見城はいわば、秀吉の「権力の象徴」である。その城の天守閣を崩落させた地震はだから、京都地震でも近畿・畿内地震でもなく、「伏見地震」でなければならなかった。
では、方広寺の大仏の方は何だったのか。
東大寺のそれにさかのぼるまでもなく、大仏は国家鎮護のためにつくられる。・・・
当初は鋳造で計画されたが、予算がなく、木枠金漆塗りに変更された。
これが後の倒壊に繋がるのだが、ともあれ、文禄4（1595）年には、大仏殿がほぼ完成。・・・。建立後、毎月盛大な法会が営まれたが、これこそはまさに、
「豊臣政権の繁栄の象徴」
であったのだ。
慶長伏見地震では、この大仏が半壊した。これでは繁栄の象徴が、「滅亡の象徴」に逆転する。

権力の象徴である伏見城が倒壊し、豊臣政権の繁栄の象徴である方広寺の大仏もつぶれてしまいました。権力も権威も追い求めた秀吉の望みは慶長伏見地震で、もろくも断たれてしまいました。このままでは、諸大名からも民衆からも朝廷からも、侮られてしまうことになります。それは耐えられないことです。

ですから、その耐えられない状況を克服しないと、豊臣政権を維持することはできないと秀吉は考えたのですかね。

『**今こそ知っておきたい災害の日本史**』では、次のように指摘しています。

秀吉には、より大きなフィクションが必要だった。権力と繁栄、双方の象徴ともなりうるフィクションが。それが朝鮮半島並びに大陸への進出。その続行だったのである。
慶長2（1597）年2月21日、再び朝鮮出兵がなされ、「慶長の役」が始まる。
秀吉にとっては失墜した豊臣政権の名誉回復をかけたものだった。そのため、抵抗の最も激しい「全羅道の制圧」を第一の目標とした。兵力は「文禄の役」にまさり、渡海軍だけでも総勢14万1500人余の兵を送る。
熾烈にして過酷な戦になった。秀吉は是が非でも勝利しなければならなかった。
戦闘は一進一退を繰り返し、日本側も中国・朝鮮側も消耗が激しかった。兵の間には
「太閤様の失策である」
という不満も募っていく。さらに、前線で戦う加藤清正ら「武断派」と後方支援の石田三成ら「文治派」の意見はことごとく対立し、これが秀吉没後の豊臣政権を二分することになる。
この成果のない戦いも、慶長3（1598）年8月18日、秀吉が伏見城で息を引き取ると同時に、終結を迎える。死の間際、彼は徳川家康や前田利家ら五大老に、
「くれぐれも秀頼のことを頼み申す」
と遺言したが、もはや豊臣の時代は終わっていた。いや、さきの慶長伏見地震が、とっくに秀吉と豊臣

家の息の根を止めていたのである。

一度目の朝鮮出兵（文禄の役）で勝利できず、慶長伏見地震で秀吉の「権力の象徴」である伏見城や方広寺大仏の倒壊が豊臣政権の崩壊をもたらしました。しかし、秀吉は悪あがきをします。

大きなフィクションを実現できれば、豊臣の権力や権威を挽回できると信じて、この２度目の朝鮮出兵が始まります（慶長の役）。

そして、この朝鮮出兵が豊臣政権に引導を渡すことになっていくのです。秀吉の死で慶長の役は終わりを迎えますが、秀吉の子・秀頼を支えるべき家臣達が「武断派」と「文治派」に分かれて戦うことになります。

その結果、武断派と家康が手を組み、文治派のリーダー石田三成を孤立させ、政治の表舞台から追放することに成功します。この両派とも、秀頼のことを考えていたのでしょうが、家康の手の上でぶつかり合い、勢力を小さくしていきます。

関ヶ原の戦い、そして２度にわたる大坂の役によって豊臣政権は終わりを迎えていきました。

ところで、あなたは、秀吉が大仏に矢を射かけたという話を聞いたことがありますか？

筆者は、この話を知ったとき、「秀吉ならやりかねないなあ」と思いました。それだけでなく、自分が秀吉だったら、きっと同じことをしたと思います。

だって、大仏は「豊臣がこの国をおさめ、栄えていくための象徴」なんですから、「おのれ、大仏め！どっしりと座っとけや」と恨みたくなるのは「当然」でしょう。「日の本（ひのもと）を護るべき大仏が真っ先につぶれるとは言語道断」と怒り、大仏めがけて矢を放つのも無理からぬことだったかもしれません。

でも、そんなことをしている段階で、「終わってる」のは間違いないですよね。

京都東山の阿弥陀ヶ峰にある豊国廟（ほうこくびょう、秀吉のお墓）

今回は秀吉の時代に起きた２つの大地震について、紹介しました。

「天正地震」がなければ豊臣秀吉が徳川家康を滅ぼしたかもしれない。ひょっとしたら江戸幕府は誕生せず、豊臣政権が続いていたかもしれない。

「慶長伏見地震」によって、朝鮮出兵や利休・秀次に対する処罰など秀吉の失政なども相まって、豊臣政権に嫌気がさしたり、秀吉への不信が募っていったこと。逆に、徳川家康への期待が諸大名のなかに広まっていったんですね。

「もし２つの地震が無かったら」どうなっていったのかは、誰にもわかりませんが、この２つの大地震によって豊臣政権が衰亡していく契機になったことは間違いないようです。

今回もお読みいただき、ありがとうございました。次回は、江戸時代に起きた大地震について紹介します。